

イスラム世界史とユートピア

イスラム共同体志向のユートピア

「ユートピア」すなわち「理想社会」とするならば、ムスリム（イスラム教徒）の考え方では、イスラムの創始期にユートピアが存在したとしてよいであろう。そのユートピアとは、預言者ムハンマド（マホメット）の造り上げたウンマ（イスラム共同体）である。

この時期のウンマは典型的な神政統治体制で、ムハンマドを通じて下される神の律法が信徒の生活のすべてを規制していた。ムハンマド在世中にかぎって言えば、この体制は非常にうまく機能し、後世常に理想のイスラム共同体として思い起こされることになる。そしてムハンマド亡き後は、その後継者たるカリフ（すなわちイスラム世界の最高主権者）を選出し、ムスリムはその指導下に国家を形成していった。

ところが、アラブの大征服によるウンマの拡大は、その質的低下を招いた。それは時期的には正統カリフ時代（六三二―六六一年）

菟原 卓

とウマイヤ朝カリフ帝国時代（六六一―七五〇年）にあたり、この頃は、征服者としてのアラブ民族があらゆる面で特権的地位を占めていたので、歴史学上「アラブ帝国」と呼ばれている。この体制下では、非アラブはたとえムスリムとなっても、隷属民にすぎず、「神の前での信者の平等」というイスラム本来の理念は、現実社会では無視されていた。しかし、ウラマー（イスラムの学者層）の努力や政治改革によって、このような不平等はしだいに改善され、アッバース朝カリフ帝国時代（七五〇―一二五八年）の初期には、普遍的な規範としてのイスラム法の体系化を通じて、イスラムの理念が政治の実践面に反映されるようになってきた。ここに、普遍的なイスラムの理念にもとづいて広大な帝国が統一的に支配される時代が到来したのであり、このゆえに、アッバース朝は、歴史学上「イスラム帝国」と呼ばれる。もちろんこの体制では、ムスリムの間でアラブ・非アラブの区別の意味はなくなった。

もつともアッパース朝の社会とて、現実には「イスラム的理想」からはほど遠いのが当然で、そのような不完全な「イスラム国家」に対する抵抗運動は、早くから存在していた。まず最初に現われたのが、ハワーンリジュ派である。この派は、コーランの規定を文字どおり政治に反映させなければならないとする厳格な教条主義を標榜していたので、ある意味では最も純粹に「イスラムのユートピア」を目指していたといえるかもしれない。しかし彼らは極端な律法主義や、あまりにも過激な行動主義を貫いたので、一般ムスリムの受け入れるところとはならず、やがて衰滅していった。

現実の支配体制を非難するもう一つのグループがシーア派である。シーア派とは、ムハンマドの従弟にして娘婿のアリーとその子孫のみがカリフであるべきだと主張する勢力である。ウマイヤ朝とアッバース朝はそれぞれ、ウマイヤ家とアッバース家がカリフ位を独占して、イスラム世界に君臨していた時代にほかならないわけであるから、初期イスラム時代を通じて、シーア派は一貫して反体制派であった。(これに対して体制派がスンナ派である。)それでも一〇世紀から一一世紀にかけてシーア派は、かなり政治勢力として成功し、イラクやエジプトといったイスラム世界の中心部にシーア派政権が覇を唱えることもあった。とりわけ強力であったのが、ファティマ朝カリフ帝国(九〇九—一一七一年、北アフリカ・エジプト・シリアを支配)である。もつとも、このシーア派王朝も理想社会を実現できたわけではない。結局、ムハンマドの後継者としてカリフを立て、その指導下に全きウンマを実現しようとする試みは、スンナ・シーアの両派ともに失敗したことになる。つまりムハンマドの造り上げたウンマをカリフを頂点とするイスラム国家に発展させ、

そこに神の命令としての正義の実現する理想的共同体を実現しようとするイスラム共同体的ユートピア志向は体制・反体制ともに、挫折したわけである。ところがここに、別な方向からイスラム的理想を追求する傾向があらわれる。それが、スーフイズム(イスラム神秘主義)の出現である。

ユートピア願望の内面化

スーフイズムは八・九世紀にはすでに発生していたが、それはイスラムの正統的教學發展のネガティブ面の産物でもあった。すなわち、神の超越性を強調する神學の發達は、神への親近感を削ぐものであったし、法學の發達は、外面的規範のみを重んじて、信仰の形式主義化を招くものでもあった。そのような「宗教的危機」の状況下、修行を通じて、自己の内面において神との合一を體驗することによって信仰を確かめようとした人々がスーフイー(神秘主義者)である。したがって、当初ウラマー(法學や神學の學者たち)とスーフイーは対立・緊張關係にあつた。しかし、主としてスーフイーの理論家たちの努力の結果、やがてスーフイズムの思潮は正統的教學を補完するものとして、イスラム信仰の中に市民権を得てくる。さらに一二世紀頃以降は、イスラム世界の各地に、地域社会に密着した様々なスーフイーの教団組織が成立・發展することにより、スーフイズムは完全に民衆化・一般化する。ここに至つて、先に述べたように、カリフ指導下のイスラム国家に理想のウンマを実現することの非現実性を承知していたムスリム大衆は、共同体に理想の実現を求めめるのではなく、スーフイーの生き方を模して、個人がその内面世界において理想的境地に達することを希求するようになった。つまり、かつてイスラム共同体志向型であつたイスラムのユートピア

ア願望は、スーフイズム的一般化によって「内面化・個人化」したといえるであろう。むしろそれぞれのスーフイー教団もひとつの共同体ではある。しかしそれが「古典的」ウンマ志向と異なるのは、活動の基本が個人の修行に置かれていたことと、原則的に国家や政治とは異なる次元で人々を結合させていたことである。

さらにもう一つのユートピアの内面化についても触れておく必要がある。それはシリア派の中に広まってきたメシア待望論である。

これは、神のみぞ知る将来に、アリー家出身の救世主（メシア、アラビア語でマフディー）が現われて、地上を正義と公正で満たすという思想である。それが教義として確立したのは一〇世紀頃のことといわれる。これは長年の反体制運動の努力にもかかわらず、スンナ派優位の体制を覆すに至らなかったシリア派の一部が、正面きつた政治闘争路線を断念して、夢を将来に託したものと解釈できよう。その後この教義はシリア派の多くに受け入れられ、現在同派中で主流の位置を占める十二イマーム派がまさにこの立場をとっている。彼らは「イスラム的正義」の実現を将来の夢の中に封じこめたわけであり、これも一種のユートピアの内面化といえるであろう。

いずれにせよ中世のある時期以降、「イスラムのユートピア」はおむね内面的・個人的・非政治的レベルのものになっていったといえるのではないだろうか。しかし、この傾向も近代にいたって変化するのである。

イスラム復興運動のユートピア

イスラム世界が西欧文明の侵略にさらされるようになってきた近代になると、そのような危機を招いたのは、ほかならぬイスラムそのものが本来の精神から逸脱し、墮落していたためであったとする

考え方がでてきた。その状態を克服するために目指すべき「理想のイスラム社会」とみなされたのがイスラム草創期のウンマであった。この初期ウンマへの回帰を志向する運動は「サラフィーヤ」と呼ばれ、日本語では「イスラム復興運動」などと表現される。ただし「復興」とはいつでも、この運動は、単なる過去への回帰を目指すわけではなく、前近代のイスラム（スーフイズムのイスラムがその象徴）を墮落としてとらえるイスラム改革運動でもある点を忘れてはならない。またこの運動には、現実的で柔軟な路線と、イスラムの原則に忠実であろうとする路線、という二つの方向性があり、後者の中でも特に過激で攻撃的な部分がいわゆる「イスラム原理主義」である。（したがって、イスラム原理主義はイスラム復興運動の一部にすぎないということに注意しなければならない。）

さて、前近代のイスラムのありかたに対する自己批判からでてきたサラフィーヤの台頭は、必然的にスーフイズムの衰退を招くものであった。これには、現代における民族主義や社会主義等の発展の影響もあつて、ムスリムが自己実現の場を、スーフイー教団の活動よりも、政治的な活動の方に求めるようになってきたという状況も関係しているであろう。このような変化を本稿のテーマと関連づけていえば、イスラムのユートピア希求はスーフイズム型からサラフィーヤ型に転換したといえるであろう。そしてサラフィーヤの最終目標が、「真のイスラム国家（具体的にはイスラム法によって正しく規制される国家）」であるとすれば、中世において一旦は政治志向から離れたイスラムのユートピア希求は、ふたたび政治志向を持つに至ったといえるであろう。もともと、この状況が初期イスラム時代と異なるのは、「真のイスラム国家」創出の夢が、現代においては、

ムスリム全体のものではないということであろう。現代のムスリムの多くが、イスラム帝国時代のような政教一致の国家体制を望んでいるとは思われない。現に、サラフィーヤが政権を樹立したともいえるイランにおいてすら、厳格なイスラム主義が民衆にはあまり支持されない状況になってきているのは、一九九七年の大統領選挙で「開明派」候補が圧勝したことでもはっきりしている。

ユートピアは何処に

以上述べたように、「イスラムのユートピア」すなわちイスラム的理想の実現の場をどこに求めるか、という点ではイスラム世界史上で変遷があった。しかしイスラム社会では、「あるべきイスラムの姿」や「イスラム的理想の実現」への希求が連続として続いてきたこともまた確かである。ここに、我々は「イスラムのすごさ」を見ることができる。それは、イスラムの持つ普遍的倫理性（弱者救済、隣人愛、常識的価値基準など）や、聖俗を包括する信頼すべき法体系の魅力などによっているであろう。また「あるべきイスラム社会」という場合、ほとんど常にムハンマド時代のウンマが理想とされるのも、イスラム世界史を通じての特徴である。ムスリムにとっては、まさに七世紀初頭のアラビアにユートピアは存在したのである。

【参考文献】

加藤 博 「イスラーム世界の危機と改革」 山川出版社 一九九七年

嶋田襄平 「イスラームの国家と社会」 岩波書店 一九七七年

嶋田襄平（編）「イスラームの世界」 日本放送出版協会 一九八三年

竹下政孝（編）「イスラームの思考回路」 栄光教育文化研究所 一九九五年

東長 靖 「イスラームのとらえ方」 山川出版社 一九九六年

中村廣治郎 「イスラーム」 東京大学出版会 一九七七年

森本公誠（編）「イスラーム・転変の歴史」 筑摩書房 一九八五年

山内昌之・大塚和夫（編）「イスラームを学ぶ人のために」

世界思想社 一九九三年